

作文の部 受賞伝達式



ポスターの部 受賞伝達式



作品コンテスト優秀作品

ポスターの部



大門中学校 2年
敦賀 由樹



新湊南部中学校 2年
川辺 涼乃



小杉中学校 3年
大菅 由愛



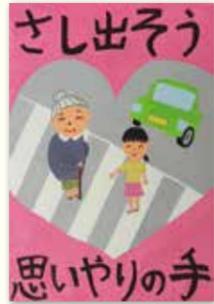
大門中学校 2年
今口 実玲



大門小学校 5年
浅井 千晴



堀岡小学校 5年
宮本 莞奈



堀岡小学校 5年
海老江 里音



新湊小学校 6年
金子 彩羽



新湊小学校 6年
小澤 歩実



中太閤山小学校 1年
熊本 恵祐



太閤山小学校 6年
堀川 詩音



小杉小学校 6年
高井 夏那実



片口小学校 6年
惣名 愛理

標語の部

射水市立小杉小学校
四年生 高田 愛里
「あいさつは人がつながる愛言葉」

射水市立東明小学校
一年生 石井 愛華
「おはよう」のあいさつは、にっこりと

射水市立堀岡小学校
四年生 永田 優衣
ダメなこと 教えてあげる ゆう気が大事

射水市立塚原小学校
五年生 甲谷 舞衣
「どうしたの」 そのひとことがうれしいよ

射水市立作道小学校
四年生 渡辺 杏樹
「ありがとう」 言葉でおくる おくりもの

射水市立放生津小学校
四年生 若林 史奈
ふやそう! あったか言葉 へらそう! チクチク言葉

射水市立新湊中学校
三年生 高岡 由貴
「大丈夫?」 その優しさから 救える命

射水市立中太閤山小学校
五年生 山口すみれ
あいさつで ひろがる笑顔 ちいきのわ

射水市立中太閤山小学校
五年生 坂野 友洋
犯ざいは やめよう止めよう まず話そう

射水市立歌の森小学校
四年生 黒田 莉音
あいさつは みんなの心の おまじない

射水市立金山小学校
六年生 京角 麻央
笑顔はね みんなができる ファインプレー

射水市立金山小学校
五年生 浦口 結衣
いやなこと いじめをやめれば みな笑顔

標語の部 受賞伝達式



第35回 射水市中学生生活体験発表会 受賞伝達式



作品展示会場の様子



作品展示会場の様子



発刊に寄せて



《社会を明るくする運動》 射水市推進委員会 委員長

射水市長 夏野元志

《社会を明るくする運動》は、全ての国民が、犯罪や非行の防止と、あやまちを犯した人の立ち直りについて理解を深め、それぞれの立場において力を合わせ、犯罪や非行のない安全で安心な地域社会を築くための全国的な運動で、今回で67回目を迎えました。

本市では、射水保護司会が中心となり、本運動の一環として、薬物乱用防止教室を開催しているほか、小・中学生を対象として、家庭や学校生活において体験したことを基に、犯罪や非行・いじめなどに関して考えたこと、感じたことなどを書いてもらう作文や、みんなが笑顔で暮らせる明るい社会を願うポスターや標語など、本運動に対する理解を深めてもらうことを目的として「作品コンテスト」を行っています。

今年度は、このコンテストに1,404点の応募をいただきました。どの作品も、犯罪や非行防止に対する高い関心と、思いやりの心や地域のつながりの大切さなど

について率直に表現されている素晴らしい作品ばかりでした。

本文集は、中でも特に優秀な作品を収録したものです。この文集を通して、より多くの方々に、非行問題などに対する意識を更に高めていただくとともに、小・中学生の皆さんの日頃考えていることや行動に対して理解を深めていただければと思います。

本市といたしましたとしても、引き続き、だれもが安全で安心して暮らせるまちづくりを推し進めるとともに、未来を担う子どもたちが、希望を持って心豊かで健やかに成長できるような各種施策に取り組みでまいりますので、今後とも温かいご支援、ご協力をお願い申し上げます。

結びに、本運動にご賛同いただき、作品の取りまとめ等にご尽力賜りました学校関係者並びに保護司各位に厚くお礼を申し上げます、発刊に当たったのあいさつといたします。



文集発行にあたって

射水保護司会会長 江尻 昭

「社会を明るくする運動」の趣旨は、「すべての国民が、犯罪や非行の防止と罪を犯した人たちの更生について理解を深め、地域のすべての人たちがそれぞれの立場で犯罪や非行のない地域社会をつくるために、一人ひとりが考え、参加するきっかけをつくること」を目指しています。

この運動は、七月を強調月間として、全国的な運動となっており、今回六十七回を迎えました。

射水市におきましては、この「社会を明るくする運動」に対する理解を深めてもらうことを目的として、強調月間前の、平成二十九年五月十八日射水市立射北中学校で『中学生生活体験発表大会』を開催、射水市内六校の代表に発表をして頂きました。審査の結果、七月一日に富山国際会議場で行われた、富山県大会の射水市代表に、「どんなリーダーであるべきか」と題し発表した牧野将也さん(小杉中三年)が選ばれました。審査中には、第六十七回「社会を明るくする運動」富山県推進大使に委嘱された富山県住みます芸人の『フィッシュ&チップス』さんにも、出演をして頂きました。

また、七月の強調月間中には、小・中学生を対象に「作文・ポスター・標語」の募集も致しました。お陰様で千四百四点と、多くの応募作品が集まり、その中から、優秀な作品を選ばせて戴きました。十一月二十五日には、アイザック小杉文化ホールラポールで表彰式が開催され、夏野市長より、一人一人表彰されました。当日は優秀作品とともに、『中学生生活体験発表大会』の優秀作品の朗読もして頂きました。今回受賞されました皆様、本当におめでとうございました。

なお、ポスター・標語の優秀作品については当日会場ロビーに展示し、十月二十日から十一月七日まで射水市役所一階ホールにも展示して、皆さんにご覧いただきました。

さて、射水保護司会では、この「社会を明るくする運動」の趣旨に賛同し、犯罪や非行の無い、明るい社会を目指し、この運動をこれからも広めていく所存です。今後とも皆様方のご指導とご協力をお願い致します。

発刊に寄せて

「社会を明るくする運動」射水市推進委員会 委員長 夏野 元志 1
射水市長 江尻 昭 2

文集刊行にあたって 射水保護司会 会長 江尻 昭 2

第67回

「社会を明るくする運動」

作品コンテスト(作文・ポスター・標語)

作文の部

「明るい社会をつくるためにやるべき事〜思いやりの輪を広げよう〜」	射水市立歌の森小学校	六年	島田 魁人	6
「いじめのこわさ」	射水市立東明小学校	六年	堀川 紗菜	8
「あいさつの輪」	射水市立新湊南部中学校	二年	澤村 理帆	10
「いじめは犯罪?」	射水市立大門中学校	二年	岡村 羽菜	12
「あつたか言葉」	射水市立堀岡小学校	六年	岡島 楓華	14
「やさしいおじいちゃん、おばあちゃん」	射水市立歌の森小学校	六年	坪田 晴琉	16
「社会を明るくするためには」	射水市立下村小学校	六年	田中 佑奈	18
「社会を明るくする運動」	射水市立大島小学校	六年	森川 聖弥	20
「赤十字・JRCから学んだ平和の実現」	射水市立射北中学校	三年	田中 愛也	22
「本当にしない?」	射水市立小杉中学校	三年	小西 祐輔	24
「マナーとモラルの大切さ」	射水市立小杉南中学校	二年	前坪 優来	26

第36回

射水市中学生生活体験発表大会



法務省社会を明るくする運動中央推進委員会主催
第67回社会を明るくする運動作文コンテスト 法務大臣賞(最優秀賞)

小学生の部	山梨県 甲府市立国母小学校	六年	土橋 葵依	28
中学生の部	茨城県 水戸市立阿見中学校	二年	飯野峻太郎	30
ポスターの部			入賞者氏名	34
標語の部			入賞者氏名	36

「どんなリーダーであるべきか」

射水市立小杉中学校	三年	牧野 将也	38
射水市立射北中学校	三年	金三津 歩	40
射水市立大門中学校	三年	奥 佑樹	42
射水市立新湊南部中学校	三年	山崎 萌華	44
射水市立小杉南中学校	二年	小沼 越琉	46
射水市立新湊中学校	三年	磯部 菜摘	48

目次

第67回

社会を明るくする運動[〓]
作品コンテスト

作文の部

「明るい社会をしるくするためにはやるべき事

〜思いやりの輪を広げよう〜

射水市立歌の森小学校 六年 島田 魁人

しまだ

かいと

ぼくが考える明るい社会は、あたたかい心で人のことを思い、助け合うことのできる世の中です。

しかし、現実には、いじめの問題や子供に対するぎゃくたい等の悲しい事件が起こり、毎日のようにテレビや新聞で伝えられています。これらの事件は、全て相手の気持ちを考えていないから起こってしまうのだと思います。やった側は、自分の思い通りにできて相手のことを考えていないかもしれないかもしれません。しかし、された側は、本人はもちろんその人の家族や友達など、関係する多くの人までもが悲しい思いをしているのです。相手の気持ちを考えていれば、このような事件は起こらないはずです。

ぼくの身の回りでは、心があたたかくなるような出来事がたくさんあります。

ぼくが近所の空き地でボール遊びをしていたときのことです。ボールが田んぼの中に落ちてしまい、取ろうとしていました。しかし、手の届ききよりではなく、困っていました。その時に、たまたま通りかかった中学生が「大丈夫。」

と声をかけ、ボールを取ってくれたのです。ぼくは、とてもうれしくなりました。

それから、満員電車に乗っていたときのことです。席が一つも空いておらず、困っていたときに、高校生が席を

ゆずってくれました。ぼくは、その人がすごいと思いました。なぜなら、きっとその人も座りたかったと思うけれど、相手のことを優先して席をゆずってくれたからです。この出来事から約一年後、ぼくはまた満員電車に乗りました。このときは、一つだけ席が空いていたので、ぼくはその席に座りました。すると、お年寄りの方が乗ってこられました。席は空いておらず、その方は重そうな荷物を持って辛そうに立っておられました。ぼくは、その様子を見て、最初は何とも思いませんでした。そのうち、ふと自分が席をゆずってもらったときのことを思い出しました。そして、「今度はぼくが席をゆずらなくては」と思い、勇気を出して声をかけてみました。すると、「ありがとうございます。」

と笑顔で言ってお座られました。ぼくは、とても気持ちがよくなりました。

さらに、ぼくの校区には、児童の安全を願う見守り隊の方がおられます。見守り隊の方は、暑い夏の日も寒い冬の日も、晴れの日も雨の日も、どんなときでも毎日ぼくたちの安全のために登下校のときに見守ってくださいます。見守り隊の方のおかげで、ぼくたちは安全に登下校することができます。だから、ぼくも見守り隊の方を大切に思っています。

このように、お互いに助け合うことや大切に思い合えること、心が通じ合うことが大切だと思います。そして、助けてもらった人が今度はまた別の人を助けることでつながっていき、それが広がっていけば、社会が明るくなると思っています。思いやりの輪が広がれば、悲しいニュースは自然となくなっていくと思います。

ぼくは、思いやりの心を広めて輪になるように、自分が助けられたら次の人を助けていくことを続けたいと思います。そして、もっと社会が明るくなるように、あたたかい心で人のことを思い、行動していききたいと思います。

「いじめのじわじわ」

射水市立東明小学校 六年 堀川ほりかわ 紗菜さな

私は、いじめにあった経験があります。友達だと思っていた人にとつ然、無視されるようになりました。いじめを受け、私は、ぜつ望しました。学校から帰たくすると、部屋に閉じこもり、一人で泣いていました。学校にも行きたくない、いじている人たちに会いたくないと思っていました。とてもつらかったです。なぜ、私が、そんな目にあうのか分かりませんでした。けんかしたり、何かきっかけがあったわけではなく、いじめはとつぜん始まりました。そして、いじめは、先生によって解決しました。先生から聞いたところによると、友達グループの中で一番中心となっている人が、私をいじめようと言いだしたそうです。周りのみんなは、自分がいじめの標的になるのをおそれて、仲間となり、いじめをしていたといふことでした。

最近では、いじめで自殺したり、学校に行けなくなったりしたニュースを見ることがあります。また、私の読んでいるマンガにも、よく似た話が出てきます。私の周り以外でもそのようないじめはあるんだと思います。大人数で、一人の人をいじめるのは、とてもひきょうで、最悪な行いだと私は思います。集団で攻げきされれば、とてもこわく、だれも味方になってくれないきょうふがおしよせてきます。私は、だれにも頼ることができなくなってしまいました。いじめられた人は、みんな、同じ気持ちになったと思います。

実は、今思い返せば、以前に自分もいじめをしていたのではと思うできごとがあります。それは、みんなで、一人の人の悪口を言っていたことです。かげで集まって、その人だけの悪口を言っていました。その時は、他の人も言っていたので私だけの責任じゃないから、悪口を言ってもいいかというような軽い気持ちでいました。でも、悪口を言われた本人はとても傷ついていたと思います。本当につらくて、私みたいな状況ようだったのかもしれない。私は、いじめられていた時に思ったことなのですが周りの人が話しているだけで自分の悪口を言っているのではないかと思っ、ビクビクしていました。悪意のある行動は、相手を傷つけます。私が悪口を言っていた相手も、悪口に気づいていたのだと思います。もし、気づいていなかったとしても、私が、悪意をもっていじめの仲間になったことに変わりはありません。

いじめは、とてもひどい行いであり、絶対にしてはいけないと思います。私は、いじめにあってる時、だれかに気づいてほしかったです。多分、いじめにあっている人は、みんなそう思っていると思います。私は先生が気づいて間に入ってくれましたが、一人でも味方してくれる人や、話を聞いてくれる人がいれば、少し楽になるのではないのでしょうか。いじめの中心になる人も悪いのですが、それを止めずに仲間になっていじめる人も、中心となった人も罪だと思えます。

たとえば、友達がいじめようと言ってきてもそれを断わる勇気もとても大事だと思います。なので、私は、たとえば友達だとしても絶対に断わり、そして他の人がいじめを受けていたら必ず気づき、相談にのってあげたいと思います。

「あいさつの輪」

射水市立新湊南部中学校 二年 澤村^{さわむら} 理帆^{りほ}

私は小さい頃から人見知りをする性格です。いつも友達から話しかけられるのを待っていたり、知らない人がいるとドキドキしたり、人となかなかうち解け合つことができない自分の性格が嫌いでした。

私が中学校に入学した時、同じクラスに外国籍の女の子が一人いました。その子は日本語があまり上手でなく話をする相手が私のクラスにはいなかったようでも他のクラスの外国籍の子の所にしゃべりに行っているように見受けました。そのせいか、その子は授業中やクラス活動ではいつもつまらなそうにしていました。そんな時、先生から「一回一回でいいから声をかけてあげてね。」

と言われ、私ははっと気付きました。外国籍の子とは言葉が通じないから話しかけても知らん顔されるんじゃないかと勝手に決めつけて『おはよう』すら言っていないかったのです。それから毎朝『おはよう』と帰る時に『バイバイ』と笑顔で言うことにしました。また給食の時は横に並んで、グループみんなでしゃべっている時も時々視線を合わせ笑いかけるように心がけました。するとその子は、言葉はおそらく通じていないと思うけれどみんなに笑顔で接してくれるようになったのです。私は、言葉が通じなくても心が通じ合えたような気がしてとてもうれしくなりました。そしてこの子ともっと仲良くなりたいと思うようになりました。そのために私なりに頑張って自分がしゃべられる中の英語で話しかけるようにしたり、先生が言っておられることがわからない時などは積極的に教えてあげるよう

にしました。するとその子に笑顔が増えてきて、私に、片言の日本語で話してくれるようになりました。その子も私と話したいと思ってくれ、努力をしてくれているというのを感じ、とてもうれしくなりました。笑顔で『おはよう』と言った一言で、自分も相手も変わることができると思いました。そして、それからはもっといろいろな人とコミュニケーションをとりたいと思うようになりました。違う小学校から来た同級生は名前も顔も知らなかったけれど、全員と一回はコミュニケーションをとることを一学期の目標にして、勇気を出して頑張り、達成しました。廊下で会う同級生はみんな友達になれたような気がして、毎日学校に行くのが楽しみになりました。

私の学校では生徒会の活動で毎朝のあいさつ運動があり、私はそこに参加するようにしました。そこでは参加している人みんなが登校してきた人に大きな声であいさつをします。また、地域の方や保護者の方が参加してくださる事もあり、生徒よりも大きな声であいさつをされて驚きますが、私も見習ってあいさつをしてみると、あいさつをする側もされる側も気分が良くなることに気付きました。

部活動では他校の生徒にも積極的にあいさつをするように心がけると、ここでも同じように会うたびに仲良くなれて、試合の時は敵だけれど、試合以外の時はお互いの良い所をほめ合ったり、励まし合ったりするようになり、試合で頑張るための練習の厳しさにも耐えられるようになった気がします。

あいさつはお互いの気持ちを伝え合ったり、いろいろな人と仲良くなるための第一歩だということがわかりました。私は中学校に入学する前は、人付き合いがとても心配だったけれど、今はあいさつをすることで人との輪が広がり中学校生活がとても楽しいです。これからももっとあいさつの輪を広げてみんなが笑顔で過ごせるような中学校生活を送れたら良いと思います。

「いじめは犯罪？」

射水市立大門中学校 二年 岡村 羽菜 おかむら はな

私は今、疑問に思っていることがあります。それは、「いじめは犯罪になるのか。」ということです。その疑問を解決するために、インターネットを使って調べてみることにしました。

まず、人をけったり、なぐったり、たたいたりして暴力をふるった場合です。この場合は暴行罪となり、相手に当たっていないくても、ふれていなくても、暴行罪は成り立つそうです。暴力をふるった結果、けがをすれば、傷害罪にもなります。

次に、「バカ」「ブス」「きもい」などと人をバカにした場合です。この場合は侮辱罪となります。また、「死ぬ」「殺す」などと人を怖がらせるのは脅迫罪になります。

これだけのことで犯罪になるのですから、いじめは、「子どもだから」「腹がたったから」という理由で許されることはありません。「いじめは犯罪になる」と分かった上で中学生のいじめに関するニュースを見ると、胸がしめつけられるように苦しくなり、とても悲しくなりました。いじめは犯罪になるのになぜいじめをするのだろうかと思いました。今までは、いじめに関するニュースや事件を聞くと、いじめられていた人がかわいそうだ、つらかっただろうなどと、いじめられた側の気持ちばかり考えていました。しかし、いじめについて考えていくうちに、いじめ側の気持ちも考えることが大切なのではないかと思えてきました。だから私は、いじめ側の気持ちを考えてみることにしました。

まず、いじめる理由についてです。私は理由の一つに、いじめられている側の人に対して怒りを感じているということがあげられると思います。いじめる側の人、初めは軽い八つ当たりのつもりでやっていたことが、だんだんエスカレートしていき、大きいいじめに発展していくことが多いと私は考えます。また、いじめる側のいじめられる側を羨む気持ちが妬む気持ちに変わっていき、いじめを行うということも考えられます。自分と相手と比較したときに「自分の方が下だ」「負けたくない」といった不快感を抱いてしまったことが原因で起るいじめも多いと思います。

このように、怒りや嫉妬心などから生まれるいじめは、一度してしまうともう後戻りできず、悪いことだと分かっているながら繰り返ししてしまうことがほとんどです。また、いじめられた人も次はいじめる側に回ってしまう可能性があります。結局、いじめは悪い方向にしか進まないのです。

私は、このような言葉を聞いたことがあります。それは、「いじめられる側にも問題がある」という言葉です。私はこの考えは間違いだと思っています。例えば、太っている、周りの人に迷惑をかけている、うそをよくつく、そのようなことがいじめられる側の問題だと言う人もいます。しかし、それは間違った考え方です。なぜなら、自分に足りないところが全くなく、他人に迷惑をかけずに生きてきた人はいないはずだからです。「いじめられる側にも問題がある」これが正しいとしたら、自分にも他の人と違うところやダメな部分があるので、自分へのいじめがあってもしかたないということになります。いじめられる側が、いじめられない人になろうとどれだけ努力しても、いじめる側の人が変わらなければならない、この世の中からいじめは消えないと思います。

いじめは、心の傷がだんだんと積み重なっていけば、人を自殺にまで追い込んでしまうおそろしいものです。人間というのは、一人ひとりバラバラで、感じ方や考え方もそれぞれ違う生き物です。だから、どんな人でも、大切な存在として尊重し合うことで、毎日を楽しく過ごすことができると私は考えます。

「あったか言葉」

射水市立堀岡小学校 六年 岡島 楓華
おかじま ふうか

テレビでいつもいつも、かんたんに人の命をつばってしまつ事件がたくさん起きていると思う。どうしてそんな事ばかりが多いのだろう。人の命をどうしてかんたんにつばってしまうのだろう。最近そういう事をすごく思う。

人の命をかんたんにつばってしまうものは思いつくだけで四つもある。包丁、ナイフ、薬、車、…。でも私は、だれでも人の命をつぶすことのできるものがすごく身近にあると思う。それは、「言葉」だ。

私のクラスでは、昔「ウザイ」「じゃま」という言葉をたくさん聞いた。今も、少し聞こえる。言う人は、言われた人がどんな気持ちになるのか分かっていっているのだろうか。表情も笑いながら言う人や、いつものふつうの顔でいう人がいる。体に対しての傷や、すり傷などのけがは治ることがあるけれど、心に対しての傷や、言葉での傷は一生治らない。言われたことがトラウマになる人もいる。言葉一つがうだけで良い言い方になるものもあれば、悪い言い方になるものもある。人を一つの言葉で傷つけてしまえば、それはもう完ぺきにいじめだと思う。

いじめをされたことが原因で、自殺をするケースのニュースを何度も見たことがある。どんないやな事を言われ、どんないやな事をされて、どんな気持ちで自殺したのか分からないけれど、もし、自分がいじめられたらどんな気持ちになるか…。

言われたくない事を、かげでも、目の前でも言われて、やられたくない事をされて、仲が良かった友達にも助けってもらえずに、絶対に学校に行きたくなくなると思う。学校に行かなくやいけないと思っていたとしても、またいやな事を言われたり、されたりするのがこわくて、精神的に追いつめられたり、こわれてしまうと思う。

私も、友達の気持ちを考えずに言ってしまった言葉がある。それは、友達が宿題を忘れてきた時だ。一回目の時は、

「そんな事もあるって。大丈夫だよ。」

と言っただけれど、同じ子ももう一回宿題を忘れて来た時に、

「また？また忘れてきたの？」

と言ってしまった。その友達が傷つくことも考えずに、言ってしまった。私の言葉で、その友達は、傷ついて、泣いてしまった。一回目のように、優しく言うことができたのではないだろうか。

人の気持ちや人が傷つくかどうかも考えずに言ってしまった、人が傷つく言葉「ちくちく言葉」。逆に、言った人も言われた人も心がホッとする「あったか言葉」。

私の学校では、運営委員会の人達で、「あったか言葉」をみんなにたくさん使ってもらおうと活動している。「がんばれ！」「大丈夫？」「すごいね！」「悲しい時に言われたら、笑顔になる言葉。こんな「あったか言葉」をみんなが使っていけば、絶対にいじめやそれによる自殺もなくなると思う。だから、まずは、そういう良い言葉があるんだよということを色んな人に知ってほしいと思う。それで、みんなが使うことで、だれもが、色んな人が、気持ち良く、快適に過ごせるのではないだろうか。そうすれば、人をいじめることはなくなると思う。

体育の授業で、とび箱の上で前転の練習をしている時、私かとび箱から落ちてしまった時に、男子から、「ダッサ。」

と言われ、笑われて、すごく傷ついてしまった。でも、女子から、

「大丈夫？男子の言う事なんか気にしなくていいよ。」

と言ってくれた。すごく心が温かくなった。たったこれだけの言葉で、人の気持ちが変わるなんて。言葉の強さをすごく感じた。

自分が今まで使ってきた言葉をもう一度考えてほしい。「あったか言葉」をかけたなら、相手がどれだけ喜べるかを考えてほしい。みんなが、全員が、「あったか言葉」を使えば、いじめが無くなるという事だけでなく、学校も社会も、この世の全部が全部変わると思う。小さいことだけど、「あったか言葉」がこの世を良い方向に変えてくれるのではないだろうか。

「やっしおじいちゃん、おばあちゃん」

射水市立歌の森小学校 六年 坪田 晴琉
つ ぽ た は る

僕の住んでいる「北野」という地区は、小学一年生が一人、六年生が二人、合わせて三人の、子供がとても少ない地区です。でも、この北野の町はとても明るいです。なぜなら、やさしいおじいちゃん、おばあちゃんがいるからです。

最近、全国ニュースでは、認知症や高齢ドライバーによる事故が問題になっていると聞きますが、僕の住んでいる北野は、高齢の方が多いのに、そのような問題は全くありません。その理由として、次のことが挙げられると思います。一つ目は、地区の住民運動会や地蔵盆などの地域の行事に積極的に参加する人が多いことです。だから、いろいろな方とふれ合う機会が多くなり、たがいに笑い合い、はげまし合い、楽しい時間を過ごすことができます。

二つ目の理由として、農作業などを地区の人同士で手伝い合っていることが挙げられます。春には田植えを、秋には稲かりを協力して行っています。採れたきゅうりやトマト、かぼちゃなどは、近所の人で分け合っています。僕の家にも、採れたてで新鮮な野菜や果物、旅行のおみやげ、海産物など、いろいろなものを近所の方が持ってきてくださいます。その度に、座ってお話をしたり、一緒にお茶を飲んだりしています。農作業以外にも、冬の雪かきや、射水市のクリーン作戦を地域のみんなで行っています。

また、おじいちゃん、おばあちゃんは、僕たち子供にもやさしく接してくれます。学校から帰ってくると「おかえり」「ただいま」というあいさつが自然と生まれます。僕が習っているそろばん教室のことについても、「何級になったの」と聞かれ、「準一級になりました」と答えると、「すごいね。これからがんばってね」とはげまされ、よりいっそうそろばんの練習にも力が入りました。年末には「よいお年を」、お正月には「あけましておめでとう」ございます、「ふだん会ったときには「こんにちは」「おつかれ様です」などと、いつでも地域全体があたたかいあいさつや会話が満ちあふれています。

他にも、夏休みのラジオ体操にも来てくださり、一緒に体操をしたり、最終日には、おかしやジュースをくださったりするので、毎日のラジオ体操に来るのが楽しみになります。

このように、僕の住んでいる北野では、地域のみんなで支え合い、ふだんからあたたかいあいさつや会話が満ちあふれているので、事件やトラブルがほとんどありません。高齢の方も子供も、みんなが楽しくのびのびと過ごすことができます。

全国で高齢化が進むこの時代、僕の住む町「北野」のように、高齢の方と子供がふれ合えたり、おたがいにはげまし合ったり、笑い合ったりでき、そしてどんな人でも安心して住むことができる町を築くことが大切だと僕は思います。

これからも、この安心して住める町「北野」がずっとずっと続くように、北野のよいところを受け継いで、僕がで

きることをつづけていきます。

「社会を明るくするためには」

射水市立下村小学校 六年 田中 佑奈
たなか ゆうな

社会を明るくするためには私は、二つのことが必要だと考えました。

一つ目は、元気の良さです。わけは、元気な声で「おはようございます。」や「こんにちは。」といさつをしたり、されたりすると自然と笑顔になれるからです。私の通っている下村小学校では、あいさつ運動を行っています。「おはようございます。」といさつをすると大きな声であいさつが返ってきます。私はとても元気になりました。このようにあいさつの輪を広げると笑顔と元気が増え、社会が明るくなると思います。

二つ目は、自分たちの住んでいる地域をきれいにする活動を行うことです。地域がきたないと見た人が不快になり、住んでいても気持ちが良いとは思いません。でもそういう活動を行うことで地域がきれいになり、気持ち良く過ごせると思います。でも一人でやっているでは意味がありません。だからみんなで協力して行う必要があります。みんなですると、早くきれいに出来るし、コミュニケーションもとれるので一石二鳥だと思います。地域がきれいになれば、コミュニケーションもとれる活動は社会を明るくするには最適だと考えました。

三つ目は、だれもが幸せにらせる社会づくりです。しょうがい者の方は、どんなにがんばってもできないことがあると思います。そこで、私たちが協力して不自由のない生活をつくってあげる必要があると思います。また、日本には保育園に入りたくても入れないいき兒童の子供や両親が共働きで忙しく夜おそくまで帰ってこれない子供もいます。そういう子供のために、安全に、なおかつ楽しく過ごせる場所をつくることも必要だと思います。自分だけでなく、みんなが幸せにらせる社会をつくることは社会を明るくすることに必要だと思います。社会を明るくするためにはまだまだいろいろなことがあるかも知れません。でも一番大切なのは社会を明るくするにはどうすればよいかを考えることだと思います。だから、私は社会を明るくするにはどうすればよいかをこれからも考えていきたいと思います。

「社会を明るくする運動」

射水市立大島小学校 六年 森川 もりかわ 聖弥 せいや

社会を明るくするには、ぼくはあいせつをしたら良いと思います。

ぼくが思うあいせつとは、「おはよう」や「よいなら」だけではないのです。みんなが声をかけ合つということ。一人が声をかけると必ずだれかが声をかえしてくれるからです。そうすると明るい気持ちになるし、笑顔になるし、がんばろうと思つ気持ちも生まれてくるからです。がんばろうと思つ気持ちがつまなかつたらだるくなるし、いやいやできまじりしてしまふからです。逆にがんばろうと思つ気持ちがつまなかつたら、元気にやれるし、きちんとてきぱきやれるし、そうするとスカッとする気持ちになるからです。

スカッとする気持ちになる人が多い社会だったら良いと思います。

いつのことだったかいいな事があつてしずんでいた時に、友達が「何かあつたん？」と聞いてきました。でもぼくはだまつていました。すると、笑わせてくれました。すると、ぼくも自然と笑っていました。その後になやみを話しました。友達に声をだして言つていつのまにかわすれてしまつてなやみが消えていました。

ぼくの友達は何をわすれていると思つけど「何かあつたん？」と言つ言葉にぼくはすくわれました。このことがあつて

から、ぼくはこの友達と親友になりました。「何かあつたん？」の言葉がけの大事さを今も思い出します。

この間の北九州地方、福岡県と佐賀県と大分県をおそつた集中ごう雨のニュースで、七月四日の台風三号が九州地方に上陸してから大雨になったり、停電になったり鉄橋がこわされたりしました。

その結果、ひなん警告が出され、じゅう民がひなんしていました。中には、年よりや傷をした人、赤ちゃんをだしている人たちがゆかにすわりこんでいました。

まつ暗の中で雷の音や雷の光、こわさだけが一ばん中おそつて来る。赤んぼつは泣きわめいていたろうし、持っているお母さんは夜もねれないだろう。体の悪いお年よりは、生きるか死ぬかも分からない。でもその中できつとおたがいが声をかけ合つていたと思います。

泣いている赤んぼつを持っているお母さんも声をかけてもらつたことで、がまんできたし、がんばれたんだと思います。

よく日のニュースでは上流から流れてきた大木で家をこわされたり、道路がこわされたりしていました。こ立していた集落もありました。自衛隊の人たちがヘリコプターで安全な場所にひなんさせていました。ヘリコプターが来るまでに周りで声をかけ合つてがんばつていたと思います。

「何かあつたん？」と言つ一言に元気をもらった自分がいたように、苦しい災害の中で勇気をあたえてくれた言葉がけがあつたと思います。おたがいに声をかけ合つ社会を創つていきたいです。

「赤十字・JRCから学んだ平和の実現」

射水市立射北中学校 三年 田中 愛也
たなか まなや

みなさんは、「JRC」を知っていますか。JRCとはJunior Red Cross日本語で言うと青少年赤十字です。僕の通う学校は、JRCに加盟していて学校の伝統となっています。

去年の八月、僕は先生や友達に誘われ、JRCトレンセンという活動に参加しました。最初は、友達と遊びに行くような、軽い気持ちで参加しました。一日目に、JRC・赤十字に関する講習を受けました。その時、僕は赤十字・JRCのすごさを知りました。赤十字の始まりは、今から約百五十年前にさかのぼります。イタリア統一戦争が起こり激しい戦乱の中で死傷者が最も多かった場所がソルフェリーノでした。その場所を通ったのが、赤十字の創始者であるアンリー・デュナンです。アンリー・デュナンは、その様子をみて「みな同じ人間どうしではないか。傷つき倒れて戦えない兵士に敵味方もない。同じ人間として助けよう」と言いました。

僕は、戦争とは敵味方に分かれて、争うことだと思っていました。しかしこのことを知って僕は、あたりまえのことを思い出しました。それは、戦争で敵味方になっても同じ人間なんだと言うことです。どうして同じ人間なのに争うのだろうと僕も疑問に思いました。

それから数か月が経って、僕はJRC活動の一貫として老人ホーム「ことぶき苑」を訪問することになりました。

僕はそこで、車いすをそうじしました。すると、働いている方や、入居しておられる方に「ありがとう」と言われ、うれしかったです。このとき僕は、同じ人間として、助けることができ、「小さな平和」を実現できたと思いました。

現在世界で戦争をしている国はいくつもあります。シリアでは政府側と、反政府側で、内戦が起きています。この内戦では子供を含む民間人も犠牲になっていることを、ある番組をみて知りました。

アレppoという戦地にある病院では、ほぼ毎日くる空爆を怖がらずに、負傷した人を助けている医者や、ボランティアが紹介されていました。自分よりも相手のことを考え、苦しみをやわらげようとする姿を見て、本当にかっこいいと思いました。

今、僕は中学校でJRC委員長をやっています。僕には、まだ現地に行って戦争で傷ついた人々を助けることはできません。

しかし日常の中でいろいろな人と接する際に「みな同じ人間どうし」だと考え、相手を助けること、少しでも苦しみをわかちあい、相手を思いやって行動することはできます。そんな小さな平和を実現していくことが大きな平和の実現につながるはずです。

僕は日々、地域や人のために自分のできることを実践していきます。

「本当にしない？」

射水市立小杉中学校 三年 小西^{こにし} 祐輔^{ゆうすけ}

「万引きは絶対ダメ」

小学生や中学生ならうんざりするくらい聞いたことがあると思う。そう、これは皆知つての通り万引き防止の講演会のお決まりの言葉だ。これを聞きたび僕は、「絶対にしない」と必ず思っていた。皆も正直「もう聞き飽きた、どうせなし」と思っていると思う。

僕は、そんなに友達は多くないが、いつも一緒にいるくらい仲のよい友達のA君がいる。

「あー。万引き防止の講演会メンドクセー、絶対万引きなんかせんから聞く必要ないし。」

と僕はA君にこれから始まる万引き防止の講演会のことを愚痴っていた。すると、A君が

「お前さー絶対しないっていいきれんの。」

といきなり質問してきた。僕は、いきなりどつしたと思いつつも、

「え、たぶんね。」

と曖昧な返事をするよ、

「じゃあ、俺が万引きに誘っても断れんだよな。」

と聞いてきたので、僕は意地になって、

「ああ、もちろん断るよ。」

といきつっていた。しかし、そんなことをいいつつも本当は友達に万引きをやめさせることができるのか、自分は万引きを絶対にしないのかという疑問が生まれていた。僕は、「絶対にしない」という嘘を強く思いこみすぎて嘘を本当にしてしまっていた。そう、自分で思っていた「絶対にしない」は口先だけの言葉で本当の「絶対しない」ではなかったのだ。これに気づいてしまったとき僕は、とても不安になった。

そんな中、講演会は始まった。講演会では、万引きに関するビデオがはいる。ビデオは見やすいのでいつもそれなりに真剣に見ているのだが、ビデオの内容は僕の興味をとてもひくものだった。その内容は、友達から万引きに誘われた男の子の話だった。その男の子は、友達のことを最初はやめさせることができなかったが最後には勇気を出して、友達のことをやめさせることができていた。ビデオが終わって僕は、もしあの時友達をやめさせることができていなかったら友達は犯罪者になっていたなと感じていたとき、その状況は自分と重なった。そして、僕は思った。ここで友達を止めることができなかったら友達は犯罪者になってしまうんだと。僕は、大切な友達が犯罪者になるなんて想像したくもなかった。だから僕はそこで決心をした。友達から万引きに誘われても、絶対に万引きをしないし、万引きに誘ってきた友達も万引きをやめさせようという決心だ。このとき、口先だけでいっていた「絶対にしない」が本当の「絶対にしない」に変わっていた。

僕は思う。僕みたいに友達が万引きに誘ってきたら断れない人がいるよ。でも、万引きに誘ってきた友達に万引きをやめさせて欲しいと思う。それは、自分の大切な友達のこの先の人生が暗いものになってしまうからだ。でも、中学生の僕たちの小さな力では出来ることはないと考える人も少なからずいると思う。でも、そんなことは絶対にない。僕たちに出来ることはあると思う。勇気を出して一歩踏み出してみよう。そんな小さな一歩が犯罪を防ぐことにつながるよ。僕は思う。

だから僕は、「絶対にしない」

「マナーとモラルの大切さ」

射水市立小杉南中学校 二年 前坪 優来
まえつば ゆら

あなたはいつも周りのことを考えて行動していますか。特に公共の場ではたくさんの知らない人たちと共同で、同じものや同じ場所を使います。そんな中でついうっかり、周りへの気遣いを忘れてしまうこともあるのではないのでしょうか。私はある出来事をきっかけに周りのことを考える大切さを実感しました。

今まで私は子どもだけで電車に乗ったことはありませんでした。しかし中学生になってから、友達と電車で出かけることも何回か増えてきました。切符の買い方もどの駅で降りれば良いのかも全然知らなかった私にとって電車で移動する時間は新鮮なことばかり。楽しい。頭の中は楽しさでいっぱいです。自分では気づいていなかったけれど、きつと周りのことは考えずに話したり笑ったりしていたと思います。

ある日、電車に乗って出かけたときのこと。まだあまり慣れていなかったのものでそのときも初めてのものがいっぱい。近くにいたおばさんに「こっちだよ。」と助けられながら、なんとか電車に乗りました。すると、電車の奥の方で三・四人の人達が周りに聞こえるような声で話していました。お年寄りや小さい子供、働く会社員など、たくさんの方が乗っている電車です。私は「うるさいね。」「もう少し周りのことを考えてほしいよね。」と友達と、誰にも聞こえないくらい声で話していました。

プシューと音を立てて電車が停まり、私達の目的の駅に着きました。出口へ行くためにホームから階段を登る途中、すぐ横にいた女の子が「さっき電車で話してた人迷惑だった。」と言いました。やっぱりみんな迷惑だったんだ。きつとあの電車に乗っていた人はみんな同じ気持ちだ。そう思いました。しかし、その女の子のお母さんが次のように言いました。「私達もあの人達のように話してしまうことがあるから人のこと言えないね。」「と。少し驚きました。きつと共感するような言葉が返ってくると思っていましたから。驚く速さと同じくらいの速さで私ははっと気づかされました。私は人のことばかり軽蔑したような目で見ていたけれど自分も同じようなことをしていたかもしれないのです。そう分かった瞬間、今まで気がつかないうちにあの人達の様なことをしていたら周りの人は…と恥ずかしく、申し訳ない気持ちになりました。そしてここで周りのことを考える大切さが改めて分かりました。

帰りの電車。疲れ果てた中、行きでの出来事を思い出しました。考えて行動しよう。まずは電車に入るとき。いつもなら扉が開いてすぐ足が進んでいたと思います。しかしこのときからは中の人々が降りてから乗るようになりました。こんな当たり前のこともテンションが上がっていた私にはできていなかったんだと感じました。電車の中では大きな声で話さないことはもちろん、電話を避けたり食べ物を食べないようにしたりしました。今回はしなかったけれど、これからは、優先席ではなくても席を譲るなどちょっとした気遣いをしていきたいと思っています。

駅にもつづく着きそうになったので扉の前に行くたびカーをもらった女の子がいました。私と友達が近付くとベビーカーをずらそうとしていました。わざわざそんなことしなくても良いのになと思いつつその人の顔を見ると、少し申し訳なさそうな顔をしていたことを覚えています。扉が開くとまだ困ったような顔をしていたので「先にどうぞ。」「と言うと、笑顔で「ありがとございます。」「と返してくれて、とても嬉しかったです。何気なく言ったのに人の力になれたような気がしたから。

どんなに小さくても些細なことでもあなたが少し気遣うだけで何人もの人が気持ち良くなるはずですよ。



「無償の愛」

山梨県 甲府市立国母小学校 六年 土橋 葵依

おばあさんは、
「なぜ、子供達の世話を続けるのか。」
との質問に、

「誰かから、直接助けると言われた事がない人には、この気持ちにはわからんじやろ。」
「言い、自分のアパートに来る子供達に食事を作り、話しかけ、毎日の生活のことを心配していた。おばあさん自身も、生活は大変だそう。それでも子供達の世話をしなければ、いられない様だった。」

私は、テレビのドキュメンタリー番組を家族と見ていた。さまざまな事情で、自分の家に居場所がない子供や食事が摂れない子供達が、元保護司のおばあさんの住むアパートに集まって来る。私のとなりで見ていた母は、「これが無償の愛って言うのかもね。」とポツリと言った。

「無償の愛。って何。」
と私が聞き返す。

「何かをする代わりに、何かを欲しがらない形の愛って

事。物とか気持ちも含めてね。見返りを求めない事。って言うのかな。子供を持つ親がそうじゃないか。って何かで聞いたけど。」
と、母から返事がきた。確かにそうかもしれない。たとえば、私が一日何もしなかったとしても、私のための食事は作られ、着ているものは洗濯される。部屋も掃除されるだろう。

「心配して下さい。」って頼んでもいないのに、
「勉強したの。学校は最近どう。友達とはうまくやっていると父と母が聞いてくる。」

学校に行くときでも、
「忘れ物はないか。ハンカチ持った。顔はちゃんと洗ったか。」
もう私も六年生なのに、毎日毎日うるさいくらいだ。こんな様子を思い浮かべると、「無償の愛。って、そういうことなんだ。」と、なんとなく分かった気がする。でもそれは、自分の子供だからだ。血のつながりもない、

名前も知らない人が、そこまで気にしてくれるのだろうか。

犯罪や非行をし、何かの処分を受けた人が、社会に戻るための立ち直りのお手伝いをするのが保護司さんの役割だと知った。処分を受けた人がその後どうなるのか今まで考えたこともなかった。立ち直ろうと思っても、仕事が見つからない。学校になじめない。近所の人の目も気になると思う。その理由でまた同じことをしてしまう人も多いらしい。さみしさや、生活の不安を犯罪で埋めている様に見えた。特に子供の場合、親からの無視と空腹が非行につながるそう。

「お腹が空いて、悪い事しか考えなくなる。」
おばあさんの所に来ていた中学生は、そう言っていた。
私は、自分の普通と言える環境が、当たり前ではなく、幸せなんだと感じた。

気持ちの中では、父と母の代わりは誰も出来ないと思っている。でも、親の代わりが必要な子供も実際にはいるんだ。「何があっても、ここに来れば大丈夫。」と言える、心の支えになる場所と人が必要だ。その場所が増えないと、非行も減っていかないと思う。だから親と同じくらい気にしてくれる、元保護司のおばあさんの存在は、大切なんだ。

毎日、新聞を読んだり、テレビのニュースを見ていても、たくさん犯罪がおこり、
「これは許せない。」と感じることも多い。父はそんな

とき、

「罪を憎んで人を憎まず。被害者や家族の事、自分ももし巻き込まれていたら、を考えるとそうもいかないのが本音だと思うよ。」

と言う。私も同じ事を思っていた。なんだか複雑な気持ちだ。犯罪や非行はいけないことだ。でも、

「何かの事情があったのだから、その人自身までは憎んではいけない。」

と言われると、そうとも思う。したことは、なかった事にはできないけれど、だからと言って「そのまま人に関わらないで下さい。」と言うのも間違っている。なんとか社会復帰して、その分何かの形で貢献できる様になつてほしい。

私は、このドキュメンタリー番組を見て、社会の一員として何が出来るか考えることができた。犯罪や非行から、本当に立ち直ろうと頑張っている人に、「この人は悪いことをした人だから。」と思いつまみず、今のその人をしっかり見つめることができる心を磨いていきたいと思つた。

母の言っていた、おばあさんの「無償の愛。」の意味は間違っていると思う。だって、おばあさんは、子供たちが、非行に走らず、社会の一員として生活できる大人になってくれる事を願っているのが分かったからだ。これがおばあさんにとっての、何よりうれしい見返りと言えるのではないか。



「温もりのある社会へ」

茨城県 水戸市立阿見中学校 二年 飯野 峻太郎

「あー。やっと辿り着いた。」
閉園間近のチケット売場の窓口に現れたその青年は、安堵の微笑でそうつぶやいた。道中迷ってしまったのかと尋ねる母に、

「いいえ、わずかな記憶を頼りに人に聞き聞き来たので、こんな時間になってしまったんです。」青年はそう答えたそうだ。

僕の母は牛久大仏に勤めている。これは、母が大仏の券売場の担当をしていた約十年前の出来事だ。

突然窓口に現れたその青年は、数年前牛久市久野町にある茨城農芸学院という少年院に収容されており、出院間近の奉仕作業で他の十数名の生徒と共に牛久大仏を訪れたそうだ。お昼に出されたお弁当や、三時のおやつのお味しさ、何よりこの時僧侶が話してくれた法話に感動し、自分の人生を深く見つめ直し心の底から反省することができた。そして、この学院を出院した暁には、必ず立派な社会人となってあの時のお礼を言いに戻って来るんだと決め人生がんばって生きてきた。そして今日、やっとその思いが叶えられたと目を輝かせて語ったのだ。

母は、若い男の子達のお腹がいっぱいになるようなお弁当の中身を考えて手配したり、たまにしか食べられないであろうおやつに何が入っていたら喜ぶかなと一つ一つお菓子を選んでいたのは自分だったこと、こうしてすっかり更生し、立派な社会人となってわざわざ訪ねてくれたことを心から嬉しく思うと伝えながら涙が止まらなかったそうだ。

現在でも、年に一度は農芸学院の生徒が牛久大仏に奉仕作業にやって来る。作業中の彼らの姿は、実に規律正しく、すがすがしく、すばらしい態度なのだそうだ。また、毎年行われている相撲大会の時など、回しを巻いた上半身裸の背中にしっかりと入れ墨が入っていたりするが、「〇〇ちゃん頑張れー」などと下の名前呼び、大声で応援し合うこ

くごく普通のまじめな少年たちなのだそうだ。

しかし、そんな彼らであっても、出院後二年以内の再入院率は十一パーセント。五年以内の再入院率は十六パーセントと、全ての少年がこの青年のように更生できるわけではないのが現実だ。

本当は更生し、まっとうに生きていきたいと思っっているのにも関わらず、彼らを取り巻く環境がそれを許さないのかもしれない。

そもそも彼らが非行に手を染めた原因も、親が素行不良であったり、養育放棄をしていたり、複雑な家庭環境があったりそういうことに起因することが多いらしい。そんなつらい現実からの逃避であったのかもしれないと考えると、彼らを一方的に責めることはできないのではないだろうか。また非行に走ってしまった彼らに対し、社会はあまりにも無関心で、手を差し延べる大人もいなくて…。

見守る大人がいなければ、悪い仲間がいる。自分の居場所〆に戻るしかない。それに、人が何かにつまずき間違った方向へ進んでしまうと、周りの人間はすぐに〆そういう人〆というレッテルを貼ってしまいがちだ。そういう色眼鏡で見るから、自分自身の力だけで方向転換することがとても難しくなる。彼らは逆に歪んだ社会の被害者なのではないのだろうかと思えてくる。

人には性善説と性悪説があるが、僕は前者を信じたい。心の性根の腐った人間なんて本当はいない。心が傷ついたり、弱ってしまったら、壊れかけてしまう人はいる。でも、そういう人間を助けてあげられるのは、やっぱり人間でしかないのだと思う。

罪を犯した彼らを、あっちの世界の人間などと分け隔てて考えるのがそもそもその誤りであって、条件さえ揃ってしまえば、心の闇が膨張し、飲み込まれてしまう可能性は誰にだってあるのだと気づくことだと思っ。その上で、彼らの痛みを本当に理解し、罪を償った後、彼らを同じ環境に埋没させてしまうのではなく、心から更生を願う人間が胸を張って生きてゆける社会を創り出すことが、延いては僕達自身が平和に明るく暮らすことのできる社会を生み出す結果となるのだと思っ。

人の表面の行動を見るだけでなく、その本質を見極めること、受け入れること、許すこと、それが今僕ができる社会を明るくする運動の手始めだ。友人関係の中で、親子関係の中で、一人一人が少しずつ実践していくことでその輪は広がり、温もりに満ちた社会が、そして世界が創り出されるのを信じている。

第67回

社会を明るくする運動[〓]
作品コンテスト

ポスターの部

小学校の部

- 射水市立新湊小学校 六年 小澤 歩実おざわ あゆみ
- 射水市立新湊小学校 六年 金子 彩羽かねこ いろは
- 射水市立片口小学校 六年 惣名 愛理そうな あいり
- 射水市立堀岡小学校 五年 海老江里音えびえりお
- 射水市立堀岡小学校 五年 宮本 莞奈みやもと かな
- 射水市立小杉小学校 六年 高井夏那実たかい ななみ
- 射水市立太閤山小学校 六年 堀川 詩音ほりかわ しおん
- 射水市立中太閤山小学校 一年 熊本 恵祐くまもと けいすけ
- 射水市立大門小学校 五年 浅井 千晴あさい ちはる

中学校の部

- 射水市立新湊南部中学校 二年 川辺 涼乃かわべ すずの
- 射水市立小杉中学校 三年 大菅 由愛おおすが ゆあ
- 射水市立大門中学校 二年 敦賀 由樹つるが ゆき
- 射水市立大門中学校 二年 今口 実玲いまぐち みれい

第67回

社会を明るくする運動
作品コンテスト

標語の部

小学校の部

- ふやさそう！ あったか言葉 へらそう！ チクチク言葉
- 「ありがとう」 言葉でおくる おくりもの
- 「どうしたの」 そのひとことが うれしいよ
- ダメなこと 教えてあげる ゆう気が大事
- 「おはよう」の あいさつしよう にっこりと
- あいさつは 人がつながる 愛言葉
- いやなこと いじめをやめれば みな笑顔
- 笑顔はね みんなができる ファインプレー
- あいさつは みんなの心の おまじない
- 犯ごいは やめよう 止めよう まず話そう
- あいさつで ひろがる笑顔 ちいきのわ

中学校の部

- 「大丈夫？」 その優しさから 救える命

射水市立放生津小学校	四年	若林	史奈
射水市立作道小学校	四年	渡辺	杏樹
射水市立塚原小学校	五年	甲谷	舞衣
射水市立堀岡小学校	四年	永田	優衣
射水市立東明小学校	一年	石井	愛華
射水市立小杉小学校	四年	高田	愛里
射水市立金山小学校	五年	浦口	結衣
射水市立金山小学校	六年	京角	麻央
射水市立歌の森小学校	四年	黒田	莉音
射水市立中太閤山小学校	五年	坂野	友洋
射水市立中太閤山小学校	五年	山口	すみれ
射水市立新湊中学校	三年	高岡	由貴

第36回

射水市中学生
生活体験発表大会

『どんなリーダーでもなぐさか』

射水市立小杉中学校 三年 牧野 将也
まきの まさや

生徒会長。それは、生徒全員からあこがれられ、尊敬される存在。全ての生徒に平等に接し、先生方からも信頼される存在。

しかし、半年前の僕は、伝統ある小杉中学校の生徒会長だなんて、胸を張って言えませんでした。自信を失い、リーダーとしてどうあればよいのか分からなくなってしまったのです。

特に悲しかったことは、ちょっと弱音を吐いたり、ちょっとふざけた発言をしたりしたときのことです。僕は話しかけが堅いので、まじめに見えるかもしれませんが、実はバラエティー番組が大好きで、お笑い芸人のギャグを真似することもあります。教室で、友達と笑いながらギャグを言ったとき、「執行部だろ。ちゃんとしろよ」と言われました。生徒会の役員はおもしろいことをするのも許されないのか。しかし、これまでの先輩方はいつも真剣でまじめに生徒会の誇りを胸に活動しておられたことを思い出すと、何も言えませんでした。

また、全校生徒の前に立って、生徒会の一員として話をした後、先生や友達から「だめ出し」をされたこともありました。一生懸命頑張ったのに、その頑張りが裏切られたような気持ちになり、悲しく、そして、言ってきた人に対して腹を立てることもありました。

ある日、やはり友達からだめ出しされて、落ち込んでいた僕は、先生に生徒会長という言葉に押しつぶされそうになっていると打ち明けました。先生は僕の話の黙って聞いて、優しくおっしゃいました。

「だめ出しや注意をされるってことは、それだけ君に期待しているっていうこと。だから、ありがたいと思って聞くことが大事」

その言葉を聞いて、僕の視界は急に開け、明るくなったような気がしました。「だめ出ししてきた」ではなく、「だめ出ししていただいた」と考えると、僕の周りの友達や先生方は、僕が同じ失敗を繰り返さないように、先回りして教えてくれていると理解できました。みんなにしていただめ出しを素直に受け入れて、直していくことで、僕も、生徒会もよい方へ近づいて行けるのだと気付くことができました。

みんなの先頭に立って、お手本になるリーダーは素晴らしいけれど、僕らしくない。みんなで一緒に歩いているときに、立ち止まっている人や進む方向が分からなくなっている人にすぐに気が付いて、声を掛けたり一緒に悩んだりできるリーダーになりたいのです。生徒会の主役は生徒だから、生徒会長は脇役でもいい、僕は僕らしいリーダーになればよいと思うのです。だから、僕の個性である、まじめな顔をしてくだらなくもおもしろいことを真剣に言う、ちよつと変わったリーダーがいてもいいと考え、僕は自信をもって、全校生徒の前で精一杯おもしろいことをやりきることができました。自分がこうありたいというリーダーを想像し、積極的に自分の思いを表現すれば、人に思いが伝わるのだということも学びました。

任期の半年間、僕はたくさんさんの生徒や先生からダメ出しをしていただきました。そのたびに、僕が求められているリーダーに近づいてきていると感じました。だめだと言ってもらえるほど、僕は生徒全員と近い場所にいるのだ、これが僕らしいリーダーだと胸を張って言えるようになりました。

今、生徒会長の職を退いた僕の心にあるのは、いつも助けてくれた友達や先生に感謝、それだけです。苦勞や失敗の先にある達成感や一体感がたまらなく好きで、やめられない。だから、僕は、今日も進んでみんなの声に耳を傾けていきます。

「地域の歴史を守る」

射水市立射北中学校 三年 金三津 歩
かねみつ あゆみ

「この博物館はね、射水市の自己紹介をしているところだよ」

新湊博物館の学芸員の方が誇らしげに話しておられるのを聞いたのは、去年の秋のことです。私は、社会に学ぶ「十四歳の挑戦」で、新湊博物館に行き、活動させていただきました。それまで博物館や地域の歴史のことをあまり知らなかった私にとって、それは、驚きと発見の連続でした。

博物館には多くの資料があり、その資料を整理する作業は時間がかかるだけでなく、難しいものでした。なぜ、こんな大変なことをしなければならないのだろうか？と疑問に思うこともありました。

次の日、市内の文化財について知るため、文化財巡りをするようになりました。ちょうど、その日はお祭りで獅子舞しており、自分の地域の獅子舞やそのルーツを詳しく知りました。「獅子舞にはこんなに多くの人が関わってきたのか」と驚き、今まではただ楽しいお祭りだったけれど、伝統を守り続けてきた人々がいたからこそ今も地域で獅子舞が続いているのだということに気付きました。

地域で守られてきたもの。それは、何も資料やお祭りばかりではありません。私は、特別な収蔵庫にあるわけではなく、風雨にさらされてもなお、その場所で地域の人に愛され、大切にされている「生きた文化財」に出会いました。

お寺にある仏像です。この文化財には地域の人々の思いや願いが込められていて、それも一緒に守られてきたのだと思うと、その重みと温かさを感じずにはいられませんでした。

私の父は、歴史や文化財に関わる仕事をしています。父は、「全てものは将来に伝えられていくことで歴史になり、文化財となる可能性がある。だけど、現代は核家族化の進行や、社会・生活スタイルの変化、価値観の多様化によって、今まで当たり前前に地域で受けつがれていた伝統行事などを維持継承していくことが難しくなってきている。」と語っていました。

地域ですつとつながれてきた歴史。今までは、歴史というと「遠い過去の出来事」くらいにしか考えていませんでした。しかし、新湊博物館での活動や父の話から、私たちには考えられないくらい多くの時間や苦労があったからこそ、今の自分がいて、今の温かく平和な地域があって、今の生活があるのではないかと考えるようになりました。私たちの祖先が努力し、後世のために一歩一歩進んできたその積み重ねが、今、「歴史」という形で私たちを包み、守ってくれているのかもしれない。

私は地域のお祭りも、私を育ててくれたこの地域も大好きです。私の生まれた地域の歴史や伝統をずっと大切にしていきたいと思っています。

歴史を守るために、今、私たちにできることは少ないかもしれませんが、しかし、地域の歴史を知ること、伝統や文化を守っている存在を知り、自分たちも地域の人や物を大切にすることはできます。それは、きっと未来へと歴史をつむいでいくことになるはずですよ。

私も、この地域で守られてきた人々の思いや歴史を次の世代につないでいける人になりたいと思います。

「心の在り方」

射水市立大門中学校 三年 奥^{おく} 佑樹^{ゆうき}

「人のために行動する。」

僕は、何度もこの言葉を聞いたことがあります。しかし、これまで実行したことはありませんでした。でも僕は、あの体験を通して、その言葉の本質を知り、実行するようになりました。

僕が毎日使っている通学路の近くに、狭い土地があります。そこには、コンビニや飲食店など、ゴミを捨てられる店が近くにないせいか、いつもゴミがたまっていました。しかし、そのゴミは掃除をする老人のおかげで、大きく増えることはありませんでした。僕は、時々老人の姿を見かけて「偉い人だな。」と思いつつ、いつも通り過ぎるだけでした。

ところが、ある日を境に僕は違和感もち始めました。それは、日に日に強くなっていきました。そして、僕はその原因にやっと気付きました。あの場所に捨てられているゴミがどんどん増えていたのです。同時に、掃除をしていたあの老人の姿を見なくなっていました。

しかし、僕はそれに気付いても、何も行動しませんでした。「なぜ人が捨てたゴミを自分が拾わなければいけないのか。」と思っていたからです。

それから数日がたち、町内ゴミ拾いの日になりました。嫌々参加した僕は、日に日にゴミが増えていくあの場所に参りました。「そこならゴミがたくさんあるし、早く終わるだろう。」という軽い気持ちをもって。しかし、ゴミを拾い始めた僕は驚きました。思っていたよりも、ずっと多くのゴミがたまっていたからです。「全てのゴミを拾わなければ、大変なことになる。」集めたゴミは公民館にもっていかなければなりません。僕は何往復もして、やっと全てのゴミを片付けることができました。

その時にはもう、「なぜ人が捨てたゴミを自分が拾わなければいけないのか。」という気持ちは消えていました。それと同時に「自分に得がないから。」と自分中心的な考えをもっていた自分に対して、怒りが沸いてきました。

人は知らず知らずのうちに、自分の利益を優先してしまいがちです。しかし、「人のために何かできるか。」という意識を少しもつだけで、その状況を変えることができるのではないのでしょうか。このような意識をもつ人が増えれば、思いやりの心をもった人が増え、みんなが優しい社会になると思います。

数日後、僕はあの場所のゴミを掃除しに行こうと考えました。しかし、その足どりは重いものでした。「こんなことをして、何の意味があるのか。」という考えが拭いきれなかったからです。もやもやした気持ちのまま、ゴミがたまった場所に着きました。「もう後戻りできない。」そう思った僕は、一人で掃除を始めました。最初は少し面倒でしたが、やっているうちにだんだん楽しくなってきました。少しずつゴミが無くなっていくことで達成感を感じたこともありました。一番は通りかかった町の人たちが「偉いね。」と声を掛けてくださったり、手伝ってくださったりしたからです。僕は、自分の心の中までも掃除されていくような気がしました。

あの日から、僕はあの場所の掃除を続けています。さすがに毎日ではできませんが、一カ月に一回はするようになっています。せっかく芽生えた「人のために何かできるか。」という意識が消えないように。僕の住む町の環境が少しでも良くなるように。そして、あの老人がいつか帰ってきた時、「おかえりなさい。」と胸を張って言えるように。

「当たり前前の幸せ」

射水市立新湊南部中学校 三年 山崎 萌華
やまざき もか

皆さんにとって「当たり前」とは何ですか。私がこのことについて考えるようになったのは、マララ・ユスフザイさんについて学んだことがきっかけです。マララさんは、パキスタン出身の人権運動家で、「女性が教育を受ける権利」を訴え、タリバンに銃撃された少女です。史上最年少の十七歳でノーベル平和賞を受賞しました。

私は彼女のことを小学校五年生のときに知り、中学二年生の英語の授業でさらに詳しく学びました。「人は皆平等なのに、国が違うだけでこんなにも生活が違う。自分がもしパキスタンにいたら、学校で勉強することができない。世界にはマララさんのように学校に通いたくても通えない人がいる。」そう考えると、私が今学校に通えることは、「当たり前」ではないのだと改めて感じます。

私は今年三年生となり、受験生として自分の進路について真剣に考え、これまで以上に意識して学習や部活動に取り組んでいます。

私は新体操部に所属しています。なぜ新体操部に入ったかという点、部活動紹介で初心者だった二年生の演技がとても素敵で感動したからです。私も新体操で先輩のようになりたいと思ったのです。

私は中学校に入ってから新体操を始めたので、体や表情が硬く、柔軟や筋トシが苦しくて苦しくてなりませんでした。新体操部の三年生は五人で、そのうち三人が経験者、私を含めた二人が初心者でした。そのため、団体では正選手でなく補欠としてエントリーされることが多くありました。

これまでの二年間は、経験者の三人に追いつきたくて必死に努力してきましたが、時には技術の差を気にして言いたいことが言えず、五人で助け合うことができない状況もありました。団体メンバーの代わりにフロアに入っても、「できなくて怒られるだけかもしれない」と思ってしまい、なかなか正選手になりたい思いを表に出すこともできませんでした。

周りに迷惑をかけ、悔しさと申し訳なさでいっぱいだったとき、「新体操は九〇%以上が心の問題だ」と顧問の先生に言われ、仲間と何度もミーティングを重ねました。そして、もう一度正選手を目指そうと思い直し、家では、自信のなさを克服するために、鏡で表情を研究したり、苦手な部分を自主練習したりと努力を重ねました。

その甲斐あって、私は先日の校内選考会で、念願の団体のメンバーに選ばれました。今では部の目標が北信越大会、全中出場となり、部員一丸となって進んでいます。私自身もその流れに乗ることができています。辛いときは、マララさんの『臆病になれば、前に進むことができなくなってしまう』という言葉思い出し、日々パキスタンで活動するマララさんから勇気ももらっています。

同じ目標に向かって高め合える仲間たち、そしていつもそばで励まし応援してくれる家族、顧問の先生、コーチ。多くの人の支えがあるからこそ、今の私の生活があることに、心から感謝しなければなりません。こうして自分が勉強や新体操に全力で取り組めることがどんなに幸せかということに私は気付くことができました。

マララさんは十一歳という年齢で、恐怖におびえながら生きる人々の生活を変えようと、命をかけて自分の考えを世界に訴え続けました。そのことを考えると、私のこの境遇や環境は、世界では決して「当たり前」ではないのです。今のこの生活に心から感謝し、周りの人のことを考えて動き、自分ができる精一杯の努力をして、私も毎日を大切に生きていこうと思います。

「選択」

射水市立小杉南中学校 二年 小沼^{こぬま} 越琉^{こゆる}

天王中学校で過ごす最後の日。新二年生のクラス名簿には、僕の名前だけがなかった……。「ねえ、転校してもいい?」

今年の二月中旬。突然、母に言われた。僕は驚き、しばらく黙ったままだった。ようやく「なんで?」と聞き返したとき、母は理由を説明し始めた。転勤になったらしい。

「でも、私について一緒に来るかどうかはあなた次第だから。」

母が単身赴任し、僕は祖父母と暮らす。もしくは母について行き、転校する。まだ何も決まっていないのに、悲しい気持ちになった。

それからは毎日悩んだ。「みんなと離れたくない。何で僕が……。」

三月中旬。僕は吹っ切れた。この転校をチャンスにしよう、と。転校のマイナス面しか考えていなかったけれど、自分を変えるチャンスに……。

これまでの僕は積極性がなく、人見知りだった。小学校から中学校へ進学する際も、見知った顔ばかり。自分から話しかけ、友達の輪を広げることもなかった。

そんな自分にプラスとなる転校。この日を境に、僕の考えは大きく変わった。

そして、担任の先生に連絡した。先生は涙を流し、僕はもらい泣きをこらえた。親しい友人たちに話した。彼らと

の別れまであとわずか。この毎日を大切に過ごそう。でも、別れが近づくとつれ、悲しさや怖さが僕を襲った。

学校に登校するのもあと二日。学年集会では僕の転校がみんなに伝えられ、僕は感謝の気持ちを述べた。涙をこらえるのに精一杯だった。挨拶の途中、みんなの方を見ると、驚いた顔や悲しそうな顔が見え、また悲しくなった。友人が代表で激励の言葉を言ってくれた。何よりもうれしかった。

秋田の中学校は年度内に離任式がある。三月二十八日。僕がこの中学校に登校する最後の日でもある。離任する先生方の涙の理由が、僕には痛いほどわかった。

教室に戻ると、帰りの会が始まった。途中、僕を送る会が開かれた。クラスのみんなが折ってくれたツルと、メッセージが書かれた色紙をもらった。最後には吹奏楽部の人が「3月9日」という曲を演奏してくれた。演奏を聴きながら、入学してからの一年間の思い出が走馬燈のように頭に浮かんできた。もう、涙をこらえることはできなかった。

帰りの会が終わった後、来年度の新しいクラス名簿が張り出される。自分の名前だけがないその名簿を、僕はただ、ずっと見つめていた。

ふるさとに別れを告げ、初めてこれから住む家を見たとき、急に不安な気持ちになってきた。

そして、僕は転校した。転校生としての挨拶。第一印象が大事だと何かの本で読んだ。でも、やはり緊張する。

挨拶は僕にしてはうまく話せた。あとで、先生方にほめられたくらいだ。これまでの僕からは想像もできない。初めてクラスに入ったとき、みんなが話しかけてくれた。緊張していた僕にはすこくうれしかった。その後も、「これまでの僕」では考えられないくらいにがんばった。転校して一か月経った今、不安も緊張も全くなっている。みんなのおかげでもあると思う。

転校を通して、僕はいろいろなことを知った。別れのつらさや新しい生活への不安。でも、悪いことばかりではなかった。いいこともたくさんあった。

この転校を、僕は後悔していない。これからも自分の選んだ道を、自信を持って選択していこうと思う。

「勇気をもって」

射水市立新湊中学校 三年 磯部いそべ 菜摘なつみ

ああ、この人たちうるさいなあ。
もうちょっとしずかにできないのかなあ。

電車の中で私は思いました。満員電車で女子高生がはしゃいでいました。私は、部活動の練習会場へいくため、友達といました。座席を占領して、アイフォンを片手に二人は大きな声で話していました。

「ねえ、この人たちすごいうるさいくない？」

私が友達に小さな声で問いかけたときです。

「は？ふざけんな。こっちに聞こえているんですけど。」

…ああ、やってしまった。

この人たちに聞こえてしまったのです。鋭い目でにらまれてしまい、目をそらすことができずしかできませんでした。あと一駅だけだ、我慢しよう、そんなふうに思っていました。

そんなとき、彼女たちの目の前にいた男子高校生が言ったのです。

「ねえ、静かにしてくれない？うるさいやけぞ。」

女子高校生の先輩らしく、彼女たちは一瞬にして黙ってしまいました。ふてくされた顔をした彼女たちは「すいません。」とだけ言って、隣の車両へ移って行きました。周りの人は嫌な顔をするだけで誰も注意をすることができませんでした。私もその一人ですが、その男子高校生は勇気を出して注意をしていました。移っていった彼女たちを見てほっとした顔をしていました。私はそれを見て短い言葉だったけど、すごく緊張したんだと思いました。もし私が

彼女たちの目の前にいたとしても、注意はできなかったと思います。でも勇気を出して注意することが大切だと改めて実感することができました。知らない人への注意は難しいけれど、知っている人にならちゃんと注意をするべきだと思います。その機会は思ったよりも早くやって来ました。

友達と一緒に高岡駅前まで行くために、万葉線に乗ったときのことです。ある駅に着いたとき、

「あ、あれ新中の後輩じゃない？」

三人の新中生が電車の中に入ってきました。こちらに気が付き、軽くお礼をして、斜め前の席に着きました。アイフォンを片手にはしゃぐ三人は、あの日と同じシチュエーション。ここは私が注意をしなければ。そうは思うものの、緊張と不安が入り混じってなかなか勇気がでませんでした。一人で考えていた私に、

「ねえ、これって注意した方がいいんじゃないか。」

友達も同じことを考えていました。自分一人では勇気がでなかったけれど、誰かと一緒なら。

「周りの人が迷惑しとるから、もうちょっと静かにしてもらええけ。」

言えた。すごく緊張した。何か言い返されるか不安だった。

三人は顔を合わせて、「はい。」と返事してくれました。ほっとした。

知っている人にも、注意するのはすごく怖かったです。私は友達と目を合わせ、元の席に戻りました。なんだかさわやかな気持ちでした。

私が三人に言ったことはすごく小さなことですが、きつと三人の心に残ったと思います。何より、電車のなかの雰囲気明るくなったような気がします。小さなことを積み重ねることで、周りの人も変わっていきけると思っし、一人一人が心がけることで周りの雰囲気がいよいよ方向へ進んでいけると思います。

これからは、自分が親切を心がけることと周りも一緒にいよいよ方向へ進んでいけるよう、頑張りたいです。そして身近な人だけでなくもっと大勢の人と親切が増える明るい社会を目指していきたいです。

ああ、この人たち親切なあ。そんなふうに思える日が増えること。それが社会を明るくすることだと私は思います。